



## 収蔵品展

# 『衣生活をめぐる民具』について

【期間】平成8年1月14日 - 平成8年8月31日 横山浩子

### ○はじめに

当館には、平成7年3月時点で約22,500点の資料が収蔵されています（ただしこれは登録分のみの数字です）が、現在常設展示室で公開している資料は、そのテーマ、また点数的にも限りがあり、当館の館蔵資料の全体を知っていただくには十分とはいえないうらみがあります。

そこで、平素収蔵庫にある資料をご覧いただく機会を設けることを目的として、また、必要に応じて常設展や特別展の内容と連動させ、そのより深い理解の一助とするため「収蔵品展」を行っています。

今回は「衣生活をめぐる民具」をテーマといたしました。

「衣」は「食」「住」とあわせ、暮らしの基本をなすものとして、今日の私達にとっても最も身近な関心事のひとつであろうと思います。

例えばこの「衣」というものについて、当館がどのような視点を持ちつつ、具体的にどんな種類の資料を収集・保存し、この20年余りの間に如何なる資料体系が構成されつつあるのか、という現状をご覧いただきたいというのが本企画の主旨です。

### ○当館の衣をめぐる収蔵品のあらまし

当館では、展示を構成する基となる資料（民具）は、整理・保管、活用の便宜上から内容別に21項目に分類され、収蔵されています。今回の展示では、A. 服飾（衣）の部分と衣料を獲得する手段としてのJ. 染織の資料が核となります（表1）、資料は複数の側面乃至属性をもっているのがふつうであり、服飾品の中でもその用途が際だっているものについては、M. 交通・運輸・通信、（道中着、道中笠、合羽など）、O. 社会生活（火事装束、戦時生活における服装や履物）、P. 信仰（山伏や巫女、巡礼などの装束、二月堂修二会に用いられる紙衣、など信仰に関わる服装）、Q. 民俗知識（学校教育などに伴う制服や運動着など）、R. 民俗芸能・娯楽・遊戯（これに伴う衣装）、S. 人の一生（腹帯、産着、<sup>よだれ</sup>掛け、子負い羽織やねんねこ、七五三の服装、婚礼衣装）等多岐にわたって分類されています。これらも勿論今回の展示に含まれます。さらに、衣類を収納、保管する用具（箆笥、行李、ボテコなど）はC. 住の項目に含まれていますが、これらを合わせると当館の衣生活をめぐる民具はおよそ2,750点余りとなります（表2）。また、今回の展示では、これら以外にも、機織りや裁縫をする

分類記号	分類	小分類記号	小分類	民俗資料細目
A	服飾（衣）	(A)	服物	イ被り物 ロ着物類(上衣) ハ前掛、袴類等(下衣) ニ履物 ホ雨具・防寒具
		(B)	結髪・化粧用具	イ結髪用具 ロ洗面用具 ハ化粧用具 ニおはぐる用具 ホその他
		(C)	裁縫・洗濯用具	イ裁縫用具 ロ洗濯用具
J	染織	(A)	繊維各種	イ藤 ロ楮(カミソ) ハ麻、絹、綿
		(B)	製糸用具	イ麻糸に関わる用具 ロ蚕糸に関わる用具 ハ木綿糸に関わる用具 ニその他
		(C)	機織り	イ縞見本 ロ藤布織り機(地機の用具) ハ機織り機(高機)と付属品(整経～織り上げまでに用いられる用具類)
		(D)	染料	イ原料 ロ染料 ハ触媒(媒染剤)など
		(E)	染色	イ施設 ロ染色用具
		(F)	その他	

表1 当館民俗資料分類表抜粋<服飾（衣）と染織>

とき手元に置く暖房具や夜なべで使う灯火用具も織りまぜて紹介しています。

○展示の構成と概要

以上のような資料体系を意識してとらえた上で、できるだけその全体を見渡せるよう、展示を次のように構成いたしました。

1. 衣服と装身—様々な時や場に応じた服飾—

衣服や装身具は、外界の様々な刺激から身体を保護するという実利的機能を持ち、季節や活動条件などにあわせ様々な合理的工夫のあとがみられます。

また、いまひとつの機能として見逃せないのは社会生活を営むにあたって、その人の状況や立場（年齢や既婚・未婚の別、職業、身分、晴れと褻の区別等）を周囲に対して明確化する役割を果たしてきたことです。

このコーナーでは、このような点に注意しながら暮らしの中に伝えられた「様々な着物\*」「かぶり物とはき物」「化粧・結髪用具」について紹介しています。

※なお、ここでは「着物」という語は、広義の意味すなわち「身体に装着する物」の総称として用いています

主な展示品

(1) 様々な着物

- ・大和各地の仕事着、普段着
- ・子どもの着物、冠婚葬祭の着物、他

(2) かぶり物とはき物

手拭い、笠、頭巾、草履、わらじ、下駄、など

(3) 化粧・整髪用具

鏡台、お歯黒用具・化粧用具、櫛、簪、<sup>かんざし</sup>笄、など

2. 衣料の作製と管理(1)—製糸・染織用具—

かつては家族の衣料を整えることは、主に女性の重要な役割となっていました。はたおりや裁縫の熟達度は女性の一人前の基準ともされ、これができなければ嫁に行けない、などともいわれました。

製糸、染織も、衣料を獲得するために必要不可欠な技術として自給的に行われていました。しかしその一連の工程は、大変手間のかかるものなので、次第に部分的専門化がおり、その一部ないし全部を外からの供給にたよることも行われるようになりました。

県下では、自給用のはたおりの他、その延長上で、地域産業としての「奈良晒」「大和緋」に関わる賃織り（業者より預かった糸を注文に従って布に織る内職仕事）が行われ、農村女性の重要な副業となっていました。

分類 取集年度	衣			住	染織						社会生活			信仰	民俗知識		人の一生			計
	A-A	A-B	A-C	C-D	J-A	J-B	J-C	J-D	J-E	J-F	O-C	O-F	O-G	P-G	Q-A	S-D	S-E	S-F	S-I	
71.10~74.10	472	169	123	68	25	346	114	1	6	0	8	7	67	25	5	3	8	37	11	1,495
74.11~75.12	58	18	2	0	1	21	6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	106
76年度	3	0	3	2	0	3	16	1	19	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	49
77年度	1	0	0	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0	0	0	14	23
78年度	5	0	0	0	0	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	8
79年度	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	0	0	0	0	0	6
80年度	2	0	0	10	1	0	1	2	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	19
81年度	17	4	2	8	0	6	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	39
82年度	20	1	1	2	0	12	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	38
83年度	65	0	0	2	0	1	64	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	133
84年度	13	4	3	6	0	3	0	0	0	0	12	0	0	0	0	0	0	0	0	41
85年度	68	2	4	10	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	87
86年度	6	0	2	3	0	1	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	14
87年度	38	12	26	15	0	12	5	0	0	0	0	1	2	2	0	0	0	0	1	114
88年度	16	8	14	7	0	73	8	0	0	0	0	3	2	0	0	0	0	3	4	138
89~93年度	162	37	52	44	0	94	34	0	0	0	0	0	11	2	0	1	0	0	8	445
94年度	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
計	947	256	232	183	27	577	252	4	28	0	20	12	85	37	5	4	8	40	39	2,756

表2 衣生活とその関連資料の点数

## 主な展示品

### (1) 繊維素材から糸へ

麻、木綿、等繊維素材と製糸用具

### (2) 糸から布へ

木綿織りの工程に使われる諸道具

### (3) 染め

藍染、植物染料の素材

### (4) 作る暮らしから買う暮らしへ

相楽木綿

相楽木綿とは、明治期から昭和前期にかけて、京都府相楽郡の西部地域辺りで農家の副業として織られていた木綿織物で、当時、南山城地域から大阪、奈良（奈良市から県東部山間地域、宇陀郡あたりにかけて）に販路をもち、商人が盛んに買付けにきたといえます。

本資料は当館の収蔵品ではありませんが、郷土の暮らしにも関わりある資料として、所蔵者の許可を得て、今回特別に展示公開させていただくことといたしました。

3. 衣料の作製と管理(2)-裁縫・洗濯・収納具-  
衣服の手入れや管理における変化として、ここでは2つの点を取り上げました。

まず、すぐに思い浮かぶのは、いうまでもなくミシン、洗濯機、アイロン等といった道具とその発達のお陰で作業効率が上がり楽になった、ということ。そして、今一つ重要なこととして、和服から洋服への形態の変化が、その着方だけでなく、衣服の手入れや管理においても変化をもたらす要因となっているということです。

和服は、その殆どが直線裁ちで、裁ち合わせの工夫により裁ちくずの出ない裁断法、寸法の余り分は、揚げや縫い代として調整するなど、仕立て方において洋服とは違った発想がみられます。これによって寸法直し、さらに傷んだ部分だけ除いて、着物から羽織やコート、長襦袢など別のものに仕立て直して更生することが比較的楽にできます。また、直線立ちのため、着物をいったんほどいて、これをもとの布状に接ぎ合わせて洗濯をしたり（解き洗い）伸子張りをしても、生地の変形が少なく、縫い直しがききます。

たたむと平らになり、収納しやすいのも和服の特色のひとつです。

脱いだら一旦衣紋竿等にかけて着皺をのば

し、そのあと常道に従ってたたんでおけば、かさばらず風呂敷や柳行李、箆笥ひきだしの抽出などに何枚も重ねて収納することができます。

こうしたことは当たり前のようにみえて、実は和服を特別なときにしか着る機会がなく、すっかりなじみの薄くなった昨今、案外実感がなく、忘れられているのではないのでしょうか。

## 主な展示品

### (1) 裁縫用具

針箱、手回しミシン、火のし、鑊こて、炭火アイロン、他

### (2) 洗濯用具

盥たらい、伸子、張り板きぬた、砧、洗濯板、など

### (3) 収納具

柳行李、ポテコ、小袖箆笥、など

### (4) 襦袢（らるる）

布団地、裂織り帯、端布細工の袋物、お手玉、ブヨクスベ、など

最後に着物や布の行く末についてふれておきたいと思います。かつて、着物は兄弟や近い間柄の人々の間でゆずられ、或いは補修を施されながら着継がれて、いよいよ傷んだものも良いとこ取りをして様々な形に転用され、その命を全うしました。残された小さな端切れにも、昔の人々の気持ちが込められていることを改めて感じるとともに、私たちの手元に残された資料が、実は昔の人々の用いたもののほんの一部にすぎないことに思い至ります。

## 〇おわりに

当博物館が収集対象としている「民俗資料」あるいは「民具」とよばれるものは、本来生活卑近のもので、それだけに日常あまり意識されることもないまま、いつのまにかときの流れの中に打ち捨てられ、忘れられています。

しかし、このようなかたちで改めてまとめてみると、「衣」をめぐる私たちの生活文化が非常に多様で豊かな内容を含んでいるものであることを感じます。

願わくは、これが展示担当者のひとりよがりではなく、ご来館の方々にも多少の共感をもってご覧いただけたら幸いです。

## 大淀町今木蔵王堂及び境内における石仏群に関する調査

浦西 勉・徳田陽子

### 1. はじめに

大淀町今木は、水系でいえば大和川水系に属する。今木の中央を大和川水系曾我川の上流の今木川が流れ、それに沿って細長く集落が形成されている。そのほぼ中程に、竜王山泉徳寺（真言宗）がある。その泉徳寺本堂の南側山腹に蔵王堂がある（図1）。

今回、この蔵王堂内の石仏群と蔵王堂境内地の野外の石仏群を中心に調査をした。また、その他、泉徳寺本堂前1点及び薬師堂裏手の六地藏1点が注目されるので、これらも併せて計19点の石仏調査を行なった（図2）。

その内、特に、蔵王堂内の石仏群は注目される。それは、銘文がある点、石仏としての完成度がきわめて高い点、そして、特色ある石仏である点などから、蔵王堂内の石仏を中心に調査を行なった。

### 2. 現状

現状については、（表1）に示すように蔵王堂内には番号10～17の8点、境内地には番号1～9の9点の石仏が存在する。堂内の石仏が保存状態が良く一見してすぐれたものが多い。境内地のものは、風雨の摩滅が甚だしく、また、もとあった地から移動してきたものもあると思われる。

その内、銘文として明確で最も古いのは番号11の役行者像で、永禄11年の年号を持つ。次いで、永禄12年のものが続く。銘文について、読みえたものについては（別記）に示した通りである。

### 3. 石仏群について

この石仏群の意味するところを考えなければならないが、今のところ、このことはきわめて困難である。常識的には大峯修験との関係の遺品にはちがいないが、それがどのような理由でこの地にあり、かつ、このような石仏の位置づけの確定が難しいからである。ここでは、銘文の意味するところを中心に中間報告としておく。

イ) 銘文：この石仏の中で、蔵王堂内の一番左側に位置する役行者と左右の前鬼及び後鬼が、永禄11年（1568）で一番古いものである。その銘文は、役行者の裏面に多くみられる。上段には、「ホウキ大山（伯耆大山）九百九十九人行 龍宮求姫 熱田大明神 吉野二王」とある。下段には、左右2行以外は、この石仏に関係のある人々の名と思われる。そのうち、地名が、「備中國境目中東」とあり、「定久女人本願」とある。この銘文の類例も

今のところ見当たらず、どのように解釈するのが良いか不明であるが、「伯耆大山」及び「熱田大明神」「吉野二王」は、それぞれの寺（修験系であろう）が推定できる。大山寺・熱田神宮寺、そして、吉野二王とは「金峯山寺」と「大峯山寺」の蔵王像の二王のことであろう。これらの寺々は、おそらくある共通点を持つ。それは、修験系でも、ある特色のある系統に属する。また、その本願とする定久のように「定」のつく家及び道金のように「道」のつく家の存在と僧侶名が、この石仏に大きな関係のあったことが理解される。これらの人がどのような人々であったのか不明である。「前鬼」「後鬼」には「妙」のつく人々の名がみえるが、これらの人々の不明である。

ロ) 地名について：「備中國」については、おそらく大山に近い位置に当たる備中で、おそらく高梁川上流の新見から奥の地ではないかと考える。大山の信仰を持つ人々なのであろう。たどってみれば大山寺における一つの盛衰の中でも、この永禄年間において決定的な事件があったようだ。そのことと関係があるのかもしれない。

蔵王堂境内地の方形の大日如来にも伯耆大山・出雲大社の銘文があり、吉野と大山との関係が強いと思われる。

では、なぜこの今木の地にこれらの石仏が存在するのか、この泉徳寺の歴史についてみなければならないが、十分な資料がないため、やはり、この点についても今後の課題であろう。泉徳寺は江戸時代、今木寺といい、『大和志』に「今木村 一名石光寺、又ノ名 弥勒寺見 元亨釈書今有 金福 泉徳二寺 俱為子院」とある。この今木寺は、江戸時代中期頃まで金福寺及び泉徳寺の二寺があり、後者の寺院が今日残る。このような流れの中で、この石仏群はおそらく今木寺時代のものであろう。今木寺の性格は、やはり、大峯修験道の関係の寺院と思えるが、その全体像の検討が必要だろう。

ハ) 永禄11～12年の年号について：吉野金峯山寺において、永禄10年には山内の満堂方と地下方の内紛が起き、合戦にまで発展し、過半数焼き払われる。永禄11年の織田信長の入洛後、この地方も松永氏から筒井氏へと変化してゆく時代であったことにも注意せねばならぬ年号である。

図 1



○印は調査地

図 2 泉徳寺蔵王堂・境内

(○印は石仏、数字は石仏番号)

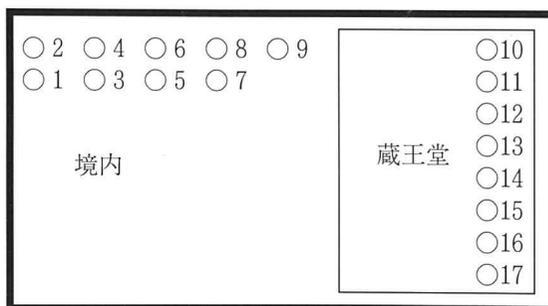


表 1 泉徳寺蔵王堂石仏 大淀町今木

番号	石 仏 名	寸 法 (cm)	備 考
	外		
1	聖観音	W27.5 D7.5 H48	銘文なし・自然舟型
2	(自然石)	W21 D18 H50.5	銘文なし
3	阿弥陀如来	W27.5 D6.5 H57	銘文?・自然舟型
4	上段 阿弥陀如来 下段 不明	W35.5 D12.5 H84	銘文なし・自然舟型
5	右側 大日如来 左側 神像?	W42 D39.7 H53	銘文裏にあり・方形家型
6	上段 天女 中段 不動明王 下段 大日如来	W51 D22.5 H124.5 不動明王の足までの高さ31 足~頭47 頭から上43.5	銘文なし・自然舟型
7	聖観音 又は十一面観音	W29.5 D12 H58.5	銘文なし・舟型
8	竜 王	W37.5 D23 H68.5	銘文なし・自然舟型
9	五 輪	W29.5 D15.5 H56.5	五輪に梵字あり・舟型
	蔵王堂		
10	前鬼 (実像)	W胸31.5 膝28 頭直径18 D胸17.5 膝23.5 頭14.5 H63 (顎までの高さ43)	銘文、裏に2行あり
11	役行者 (実像)	W足元42 胸41 頭26 D足元36 胸22 頭25 H108 (足元まで23 足元~膝30 膝~首31 顔14.5)	銘文、正面膝・足元と裏にあり
12	後鬼 (実像)	W足元27 胸31 頭15 D足元21 胸13.5 頭16.5 H62 (顎までの高さ42.5)	銘文、1行あり
13	役行者 (実像)	W台座48.5 像38 膝28 顔12.5 D台座37.5 像足元33 膝26 顔11 H台座27.5 像67	銘文、台座にあり
14	蔵王権現	W足元58.5 胸62.5 頭56.5 D足元32.5 胸21.5 頭21.5 H132.5 (足元まで15 足元~顎64 顔~頭27)	銘文あり 自然舟型
15	役行者 (実像)	W足元19.5 膝19.5 胸14.5 顔7 D足元12 膝12 胸9 顔8 H39 (膝までの高さ17 膝~顎13)	銘文なし 顔、剥離
16	上段 神像 下段 竜像	W足元37.5 胸36 頭34 D足元16.5 胸16.5 頭16.5 H78.5 (神像の全身38)	銘文あり 自然舟型
17	交叉の竜王 上右 馬頭観音 上左 阿弥陀如来	W足元42 胸56 頭56 D足元19 胸15 頭19 H124 (足元までの高さ23 足元~交叉26 竜全身65)	銘文、正面下にあり 自然舟型 御影石
	薬師堂の裏、峯一党の墓の手前		
18	六地藏	W35 D16 H73	銘文、裏にあり 自然舟型
	泉徳寺境内		
19	越 (むくり) 舟型 比翼塚 上 2 仏 下 2 仏	W下50.5 神の足元55 頭41.5 D下13 神の足元8 頭4 H106 (下の仏の足元30 仏の高さ17.5 上の仏左31.5 右31.5)	銘文、正面左右にあり 自然舟型

泉徳寺蔵王堂石仏の銘文

十一 役行者

(膝上右) 十四之

(膝上左) 月日

(足元) 永禄十一年三月日

(裏)

西戎

北狄

永心

宗長 宗見

備中國境目中東

九百九十九人行

定久女人本願

龍宮求姫

浄永法印

道秀 道願

熱田大明神

浄飯法印

道泉イロタカ

吉野二王

浄舜法印

牧□道祐□淳

(裏) 妙祐銀靈妙西

妙金妙正妙金

□舜

宗圓

熊千代や七

浄善

道観

東夷

道心

南蠻

五 大日如来・神像?

十二 後鬼

(右横) 永禄十二年

ヲツル妙正妙金

(左横) □□三月十四日

十三 役行者

(裏) 出雲大社

伯耆大仙

播麻村

念佛講中

九 五輪

ハウキ大山

六親之伸御

道金

大坂講元先立

福壽院

梵字

九百九十九人行

定久女人本願

ケン五郎

御本山

田中五良兵衛

十 前鬼

(裏) 妙祐銀靈妙西

妙金妙正妙金

吉野二王

宗圓

熊千代や七

浄善

道観

東夷

道心

南蠻

願主 鴛之内

淡路屋 兵衛之立

棉町



十四 蔵王権現

(右側下) ケン五郎

備中國境目東定宮女人本願  
永祿十二年癸三月十一日

(裏下) 真長

妙榮 逆修

祐圓 浄久

善祐 道西

ヲヤス 妙圓

十六 神像・竜像

(右上) 三界萬霊

(竜の上、神像右側) 三千世界代々末世有不滅

十七 交叉の竜王像

(裏)

六荒神

クワンノンホサツ

モンシユホサツ

ヤクシヤウホサツ

ケトクホサツ

フケンホサツ

シンクワホサツ

□ □ シホサツ

ヤクワウホサツ

メウケンホサツ

□ リホサツ

チサウホサツ

ホウシホサツ

ケン五郎  
浄永法印

(正面下) 永祿十二念三月十一日

(正面下) 備中國

境目東

不佛面

不神面

定久女人

本願

(左側下) 盗人神

□ 人神

—— お 知 ら せ ——

収蔵品展「衣生活をめぐる民具」

平成8年1月14日→8月31日

[表紙写真] 裁縫・洗濯用具

前列右から

ヘラ・コテ・コテ・ヒノシ・ヒノシ・炭火アイロン

後列右から

ボテコと布・針箱・砧と打盤(いずれも当館蔵)

常設展「大和の生業」

■大和の農村のくらし(稲作・大和のお茶)

■大和の山村のくらし(山の仕事)

観覧料金

(個人) 大人200円 学生150円 小人70円

(団体) 大人150円 学生100円 小人50円

(20名以上) ※入園および民家見学は無料

閉館時間 館内 午前9時～午後5時

(ただし入館は4時30分まで)

民家 午前9時～午後4時

(博物館および民家の見学所要時間は約1時間30分)

休館日 毎週月曜日(その日が祝日のときは翌日)